

第三章

遊びの中の広告

◆江戸の遊び

今ではその気になれば、いつでもどこでも遊ぶ場所と時間を選ぶことができる。しかし江戸時代はそこまで自由ではなかった。まるで封建社会の中でのストレス解消法とでもいうように、江戸の庶民は自然でも信仰でも楽しみにかえるのがうまかった。祭は江戸っ子の生きる喜びであり、節目節目の四季の行事はそれぞれに意味があった。どれも幸せな生活をするための心構えと感謝が含まれていた。そしてこれが自然の摂理にも合っていて、今振返っても案外科学的なのである。たとえば正月の屠蘇トソは鬼気を途絶し人魂を蘇生させ、一年間の悪い物を払って長寿を願って飲む酒だ。今のようにただの酒ではなく、肉桂ニッケイなどの漢方を酒や味醂みりんに浸したものである。

また、江戸の生活は季節の摂理に基づいていた。現在の太陽暦とちがい江戸の太陰暦は、日本の気候風土に合うように春夏秋冬の太陽と月の動きをもとにつくられている。この暦は現在のように一年を十二月に分けるのではなく、二十四節氣に分けてある。それを一年三六五日にして大の月三十日、小の月二十九日で形成して、三十三か月に一回閏年を入れていく。種蒔きから収穫、季節の魚を捕ることまで決めることができ、江戸時代の人たちには便利で合理的な暦だった。時刻も今とは違う。日の出から日の入りまでが昼間で、それを六等分していた。だから夏の一日は長く、冬は短い。夜も同じように分

江戸イベント一覧

月 日	行 事
1月1日	恵方参り(年始)
3日	上野両大師詣
5日	初水天宮
8日	初薬師
10日	初金比羅
18日	初観音
25日	初天神
2月初午の日 彼岸	初午 六阿弥陀粥、三十三所観 音札所参り
3月3日前後 17・18日	潮干狩り 浅草三社権現祭り
3月～4月	花見 上野・飛鳥山・御殿 山・隅田堤
4月みそか	亀戸天神神御衣祭り
5月28日～8月28日	川開き・花火・螢祭り
6月15日 28日から	山王日枝神社祭り 大山石尊詣
7月9日 26日	四万六千日 二十六夜
8月15日	八幡祭り・月見
9月15日 16日	神田明神祭礼 芝神明・目黒不動祭礼
10月6日～15日 13日 20日	御十夜 御会式 恵比寿講
11月28日 西の日	報恩講 西の市
12月17・18日	浅草観音の年市

◆イベント

けていた。このように季節とともに暮らしていた江戸時代の人々が、一番身近に感じていた遊びはまず季節の行事や祭りだった。こういう人の集まる場所で行っていた見世物は、安い木戸銭や気持ちだけのお金で済み、また道端の大道芸などは見ているだけでもよかった。江戸の庶民はこの盛り場へ行けば、お金をかけずに一日中遊べたのだ。悪所と呼ばれる遊里やお金がかかる大きな芝居が催される芝居町などは、庶民が気楽に遊べる場所ではなかったが、おおいに楽しんでいた。ここから江戸の文化がつけられたといっても過言ではないくらいだ。新しいものが生まれている。案内本や土産の錦絵など広告宣伝物を通してそれが見て取れる。イベントの広告や宣伝的要素を含んだ江戸時代の人たちが残してくれた資料から、われわれも江戸人の楽しみを味わえる。

正月にはじまり、節分、梅見、雛祭などをやっているうち暖かくなり、心地好い花見の季節だ。端午の節句、山王祭が終わると夏が来る。夏のレジャーは両国の川開きからはじまる。七夕を過ぎ秋になると月見、虫きき、富岡八幡や芝大神宮、そして山王とは一年おきの神田明神祭、この祭が終わる頃、菊と紅葉がきれいな晩秋となる。芝居の顔見世、七五三、西の市の次はもう師走、正月支度の年の市、そして大晦日。この間、雪が降れば雪見も楽しんだ。

これらの楽しみは、名所・祭りの錦絵などで宣伝された。また『江戸名所図会』などの案内本によって広く紹介された。現在は、いくたびかの災害などで江戸の名所だったところもほとんど様をかえている。また古くからの行事もほとんど失われた。